

源氏物語爪印 —紅葉賀巻—

村 井 利 彦

- 【1】「朱雀院の行幸」(11)。長く続いた中の品のトンネルを抜けて、いよいよ光源氏の、本来の世界、表舞台に出たという印象が強い。若紫巻、および末摘花巻にあった予告が、いよいよ現実のものとなる。私的空間からの脱出である。裏から晴へ。その意味では、心理的にいって、この巻は桐壺巻に続く巻なのだ。晴の世界を語る前に舞台裏を見せておくと、読者は自ずと晴の世界の批判者となる。そういう読み目の論見を源氏物語は構造としてもっていることが理解されよう。ところで朱雀院とは誰。桐壺帝の父、あるいは兄。それとも別系か。
- 【2】藤壺のためにわざわざ試楽をやる、このことは桐壺帝の藤壺に対する絶大な愛を意味する。この時、藤壺は帝を裏切り光源氏の子を身籠もっている。試楽のヒーローが光源氏。コキユ桐壺帝が、その光源氏を手放して絶賛するという構図。裏を知っている読者として身のおきどころに困る設定ではないか。
- 【3】光源氏の親友・頭中将は当代第2位の男である。「容貌、用意、人にはことなる」頭中将のことを「花のかたはらの深山木」という。光源氏の独走的美しさの表現である。
- 【4】光源氏の声を「迎陵頻伽」と表現したのは、光源氏的美しさを、極楽世界のイメージによって強調しているということで、これは、北山僧都が、優曇華の花をもちだしたことと連動している。⇒若紫【25】
- 【5】光源氏的美質の徹底した強調は、すでに成立している光源氏と藤壺の罪の正当性を主張するものとして了解すべきではないか。神の美しさは罪を越える。「磨は許されたるぞ」という発想。はたしてこの発想、読者の支持をとりつけることができるかどうか。
- 【6】「常よりも光ると見えたまふ」(12)。桐壺巻の「世の人光君と聞こゆ」、帚木冒頭の口上以来の発想である。この巻が、桐壺巻に接続する感覚を与えることをよく示す条文である。
- 【7】弘徽殿女御を「春宮の女御」と呼ぶ。この口吻、政治的雰囲気醸成に効果が

あろう。近い未来の権力者のイメージである。

【8】その敵方の東宮の女御をして、「神など、空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」(12)と言わしめる。光源氏的美質強調はここに極まる。しかし、この刺を含んだ言葉は、読者の胸に不吉なイメージを喚起せしめることであろう。醍醐天皇の大井川行幸の時、感動的な舞姿を披露した雅明親王の夭折のイメージである。『大鏡』には、「あまり御かたちの光るようにしたまひしかば、山に神めでて、取りたまひてぞかし」とある。この条、覚えておくと、須磨の海岸にたつて海の神に危うく取られそうになる光源氏の近い未来の参考になろう。⇒須磨巻【52】

【9】「宮は、やがて御宿直なりけり」(12)。さりげない記述だが、桐壺帝の、藤壺にたいする愛の表示である。光源氏の青海波を絶賛する帝の無邪気さが不気味である。⇒【2】

【10】「中将の君」という言葉(13)。この言葉の響き、在原業平への連想がはたらし、禁断の恋に身をもち崩す男のイメージをかもしだす。

【11】光源氏と藤壺との贈答歌(18)。光源氏は、藤壺のためにだけ青海波を舞ったのだといっている。藤壺は、遠回しながら、光源氏の「袖うち振りし心」を了解している。もはや返歌など期待できぬ状況に追い詰められつつあった光源氏の感激、おして知るべしであろう。

【12】「ひとのみかどまで思ほしやれる御后言葉の、かねても、と、ほほゑまれて」(13)とある。藤壺が立后するのは、この巻の終わり。若君誕生の後である。光源氏が、この時点で、これを想像しているのは、当事者としていかにも傲岸不遜である。そういう不遜な思い、行動が、弘徽殿方を非常に刺激していたと考えたい。

【13】朱雀院の行幸は、親王はもちろん、「世に残る人なく」参加。東宮もいらっやるというオールキャストの盛儀であった。おそらく、桐壺時代を通じて最大の行事であったのではあるまいか。本文に「この世のこととおぼえず」(15)とある。

【14】試案、そして本番で青海波を舞う。光り輝き、紅葉より美しい光源氏の姿。彼の青春時代の栄耀栄華はここに極まる。が、この栄耀栄華は、転落の匂いを内にもつ。罪が露顕せぬ間の、非常に危うい、表面だけの栄耀栄華として設定されている。で、ひとしお青春的で、哀れなのである。

【15】日本最古の音楽書『教訓抄』によれば、青海波は龍宮の音楽である。このことを知れば、これは、若紫・北山の間から連続する場面であるという読みが可能となろう。明石登場の前奏曲。そう読むべきではないか。この巻にたちこめる神仙的雰囲気も、そう読んではいじめて意味をもってくるといえないか。あるいは、この舞この音楽を藤壺の腹の中の皇子のためのものであると考え、海龍王国の母から生まれたという伝説をもつ皇孫のために光源氏が舞っているのだという読みも浮上しよう。はたまた、舞っている本人こそ、海龍王国の子孫にふさわしいということか。はなはだ興味深い「青海波」である。

【16】「まだ童」である「承香殿の御腹の四の御子」(15)の点描は、現在、桐壺帝が父親になってもおかしくはない状況の説明である。宇治八宮もすでに生まれているものと想像される。近いうちに生まれるであろう光源氏と藤壺の子は、大人らしい兄弟のなかに異質な存在として放り出されるのではないということを、このことは意味する。罪は隠れる可能性がある。隠れる分だけ心の痛みは増す。ところで、この童が「秋風楽」を舞ったのが、この晴の日の二番目の見物であったとあるのは、雅明親王のように、山の神に取られる役がこの童ということになり、光源氏は安全なのだという読者への安心感をかます効果は確かにあろう。⇒【8】

【17】藤壺の退出(15)。「そのころ」とあるから、これは十月中旬である。彼女は月数を合わせなければならないのである。若紫巻の事実には照らして、彼女は絶対に今年の春の内に懐妊したのだとせねばならないわけで、現在八カ月。あと二カ月程で出産の予定で断固として行動し、そのように演技せねばならないのである。実際はこれより二カ月ばかり遅れることになるのは自然の摂理からいっていかんともしがたいことだ。さて、どうなるか。スリリングな展開である。

【18】葵上の記事(16)。彼女の側はすでに、光源氏が二条院へ女を迎えたという情報を得ている。彼女の不満は内攻し、光源氏との仲がまた一つ冷えていく。光源氏は、葵上の態度に不満足ながら、「人よりさきに見たてまつりそめ」た点に鑑み、彼女に対する敬意を失わず、真意をいつかは彼女が理解してくれるものと考えている。と言われると、読者はここで、葵上が、桐壺帝後宮における弘徽殿女御の立場にあることを了解するはずである。であれば、もはや葵上は詳細に描かれる必要はない。葵上と弘徽殿女御とは相互補完の関係になるからである。これも、作者得意の技法である。

【19】幼い紫上の記事(16～8)。「母なき子持たらむこちして」という光源氏の心理描写。光源氏自身も同じ、母なき子である。両者は運命を共同して固く結ばれている。北山僧都には事情を説明している。父親の兵部卿にはまだ何も言っていない。

【20】光源氏が藤壺の三条宮は見舞いに行った時、「命婦、中納言の君、中務などやうの人々」が取次でてきた。それを、光源氏は「けざやかにもてなしたまふかな」と思っている。これまで、藤壺の許まで、フリーパスであったことが分かる。こういう様変わりとは、藤壺の意思である。藤壺は確実に変化している。そして、光源氏が兵部卿に出会うところ。知らぬは宮ばかりなりといった設定が面白い。

【21】光源氏の思念。「昔は、上の御もてなしに、いとけ近く、人づてならで、ものも聞こえたまひしを」(18)は、桐壺巻後半に接続する。この巻は、桐壺巻を非常に意識して、作られている。

【22】藤壺が光源氏を愛していたことをうかがわせる記事は、注意してよめば結構多い。「けざやかにもてなしたまふかな」「宮の御けしきも、ありしよりは、いとど憂きふしにおぼしおきて」「はかなの契りやとおぼしみだること、かたみに尽き

せず」など。しかし、懷妊以来、藤壺の態度は確実に変わってきている。女から母、あるいは政治家への変貌である。彼女は光源氏より先に大人になってしまうのである。光源氏は、正月、紫上と戯れるところで、「今日よりは、大人しくなりたまへりや」(20)と言うが、人のことなど言っている場合か、と読者は思うはずである。

【23】その紫上だが、藤壺とは対照的に、若紫巻の時点とちっとも変わっていない。「犬君が」の台詞はその象徴である。「われは、さは、夫まうけてけり」の認識がいささかの、進歩といえない進歩である。

【24】相変わらずの葵上だが、彼女の新事実が描かれている。彼女は光源氏より「四年ばかりがこのかみ」(22)であったということ。桐壺巻に「女君はすこし過ぐしたまへるほど」とあったが、ここはさらに踏み込んだ記述である。さらに彼女は「宮腹」の一人娘。彼女の母・大宮は、桐壺帝の姉か妹。しかも后腹である。父は当時の最高権力者・左大臣。彼女の出自は、光源氏に勝るとも劣ることはないわけで、彼女が光源氏に対して負い目を持つ必要はさらさらない。光源氏の行為をじっと耐えるという行動様式は、彼女にとって似つかわしい態度ではない。また、頭中將は、帚木巻で「宮腹の中將」と紹介されていたから、彼と彼女は同腹。光源氏に對抗してやまめ頭中將の行動様式は、葵上のそれに同じと了解してよい。作者は恐らく、葵上のことは、頭中將と弘徽殿女御を描いておけば、わざわざ描く必要はないと考えているにちがいない。

【25】葵上が光源氏より四年年長であるということは、左大臣と宮の結婚が、桐壺更衣の入内より少なくとも四年前に執り行われているということである。皇族が臣下に天降るというのは、きわめて異例のことだ。これを、どう解釈するか。政変を想定するとすれば、この四年という歳月が鍵となろう。とにかくにも、左大臣と宮の結婚は、若菜巻の光源氏と女三宮の結婚とは様相を異にしたものであったと想像される。また、だいぶ年の違う娘を、わざわざ東宮を避けてまでして光源氏に与えた左大臣の胸の内も、当面の謎である。

【26】光源氏に不満をもちつつも、光源氏を見ると、そんな心が吹っ飛んで、かいかいしく世話をやく左大臣の姿(22~3)。「生けるかひあり、たまさかにても、かからむ人を出だし入れて見むにますことあらじ」は、この巻の光源氏の、ものみな許される神仙的美しさに呼応する発想であろう。左大臣の行為を、政治的に解釈するのは間違っているのかもしれない。光源氏の前で、彼はただのファンにすぎないのだと考えておくほうが正解か。

【27】光源氏が年賀の挨拶に行った「一院」とは誰のことか。行幸の行われた朱雀院のことか。

【28】年賀に来た光源氏を「几帳の隙」より見る藤壺。「思ほすことしげかりけり」(23)と本文にある。彼女は心の底で、全く光源氏を愛しているのである。彼女の胸のうちは、空蟬と同じと考えておくとよいだろう。

【29】藤壺の出産日が予定を大幅に過ぎてしまい、二月にずれこんだのは当然のことである。「中将の君」である光源氏は、これでもって「いと思ひあはせ」ることができたのだし、読者として同様であろう。知らぬはコキュウ桐壺帝と「御もののけにや」と心配し大騒ぎする善意の「世人」のみである。

【30】藤壺は弘徽殿女御への敵対心をテコにして、産後の危機から立ち直る。新しい藤壺、強い藤壺の開始である。こうして、彼女は桐壺更衣のイメージから脱出してゆくことになる。こういう強い藤壺を可能にしたものは、葵上や頭中将と同じ出自意識だろう。彼女の父は先帝、母は皇后だった。弘徽殿女御など何程のものかという意識である。

【31】生まれた「男御子」が、「めづらかなるまで写し取りたまへるさま、違ふべくもあらず」という設定。罪に形を与え、罪を犯した人の傍らに存在しつづけさせるという構想。源氏物語がさらに厳しい局面に踏み込んだ様相がうかがえよう。「さらぬはかなきことをだに、疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにか」(25)

【32】王命婦の胸のうちの描写(25～6)。藤壺が心の底で光源氏を愛していることが確認できる。と同時に、出産後、新しい藤壺が強い意思でもって目覚めてきていることも注意されるところだ。

【33】光源氏のコピーのような御子を見た桐壺帝が、「またならびなきどちは、げにかよひたまへるにこそは」(27)と、手放して喜ぶ姿は壮絶である。人の善さというものは、かくも無残なものなのである。桐壺帝は、ただいま二重に、子を思う人の親の心の闇の真っ直中であって、何も見えぬ状態である。

【34】桐壺帝の心理に則していえば、藤壺が桐壺更衣の代行であったと同様、光源氏に生き写しの、この「疵なき玉」(27)の男御子は、光源氏の代行なのである。この御子を「坊にも据ゑ」ることによって、過去光源氏をそうすることが出来なかった後悔の念、桐壺更衣、あるいは桐壺一族に対する罪の意識から逃れたいと帝は思っているのである。これで、ますます、この紅葉賀巻は桐壺巻に接続するわけだ。

⇒【1】

【35】お前によく似ているのだよ、と嬉しそうに言う帝から御子を初めて見せられた時の光源氏の描写。「中将の君、面の色かはるこちして、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふこちして、涙おちぬべし」(28)は、反対の感情が同時に混在し取り乱している様の見事な描写である。さて、この一文の前後わずかに12行の中に、光源氏を「中将」と呼んでいるところが3ヶ所もあるという事実にも着目しよう。在原業平、『伊勢物語』の禁断の恋のイメージを作者は読者に期待しているのである。

【36】光源氏と藤壺の贈答(28～9)。最大の危機を脱した共犯者の連帯がうかがえる、といったら言い過ぎか。ここで、藤壺はこの御子が光源氏の子であることを光源氏

に告げている。さて、この藤壺、元 僧正に通じて一子（後の僧正善珠）を儲けたという伝承もある光明皇后のイメージがないか。かがやく日の宮。⇒井沢蟠竜『広益俗説弁』巻六。

【37】紫上はまだ、もの思いの「なぐさめ」（29）の存在でしかない。しかし、彼女はその音楽的才能とあどけない可愛らしさでもって確実に光源氏の心を占領してゆきはじめている（29～30）。現に、この日、葵上のもとに行く予定であった光源氏は、この少女の可愛らしさが原因で、取り止めている。閉塞状態を示す藤壺の世界から、この少女の世界へと源氏物語は確実に旋回しはじめています。

【38】光源氏の秘密。少女との同棲という一件は、葵上方に知られている。帝も知るところとなっている（32～3）。彼の秘密暴露は、本丸にせまりつつある印象で予断をゆるさないスリリングな感覚を読者に与える。

【39】「年いたう老いたる典侍」つまり源典侍の登場によるドタバタ劇は、この巻のガス抜き作用をする。こういう馬鹿げた話でもなければ、この巻は息苦しさすぎるのである。

【40】年をとって無残な姿になっても姪欲の抜けない源典侍は、さながら伝説化された晩年の小野小町ではないか。源経信の『伊勢物語知願抄』に描かれた小町の無残な老後説は、それより約百年前の紫式部のころすでに成立していたのであろうか。

【41】光源氏と源典侍とのやりとりを目撃した桐壺帝が源典侍をからかう。照れてはいても弁解しない彼女を作者は「憎からぬ人ゆゑは、濡衣をだに着まほしがるたぐい」と書く。言いえて妙である。光源氏は、もう一つ秘密をここで帝に掴まれてしまったわけで、発覚の対象がお笑いでよかったという例にすぎない。と、考えると、このガス抜きも、一見そうみえるだけで、実は危機を肥大化する要素の一つにすぎない結果となっていることに注意しよう。

【42】光源氏と源典侍の色恋沙汰に頭中将が絡んでくるのは、一年以上前の末摘花の時と同工異曲である。が、現場に踏み込むところが、数段の迫力である。

【43】光源氏の心理。「齢のほどいとほしければ、なぐさめむとおぼせど、かなはぬもの憂さに」（37）は、『伊勢物語』63段、九十九髪の話を中心に意識した構成である。ここでは、さしもの光源氏も業平に完全に負けている。この話、ものぐるおしさという点で、光源氏と藤壺の罪の重さと釣り合わされていると考えるべきである。

【44】源典侍の年齢は「五十七八」（40）と書かれている。光源氏と頭中将のことを「二十の若人たち」といっているから、この恋、一世代越えた恋ということになる。とすると、光源氏と六条御息所との笑えない恋を意識した設定という捉え方も可能である。なお、頭中将は葵上の弟であると推定される。「妹の君」（43）とあることから明らかなように、姉のことを妹とも言うのである。

【45】光源氏と頭中将は、源典侍というとんでもない秘密を共有し、いよいよ親密になる。頭中将が光源氏と競争する心理の説明が改めてなされている（43～4）。頭中

将と葵上のみが「皇女腹」なのである。すでに【24】で注意したごとく、頭中将の、光源氏に対して「何ばかり劣るべき際とおぼえたまはぬ」心理は、葵上の心の内の思いと一緒にある。この巻は、共犯者の連帯が二つある。光源氏と藤壺。そして光源氏と頭中将。したがって源典侍のことは、本筋への補強、バックアップなのであって、筆のすざびに漫然と描いているのでは決してないのである。

【46】「されど、うるさくてなむ」(44)は、このくらいで止めます。もっといっぱいあるんですがね。といった感じである。と言いつつ、必要なこと以外私は書いていないんですよという作者得意の逆表現と十分に推察されよう。

【47】光源氏を宰相にしたのとはかくとして、周囲の反対を押し切るかたちで、桐壺帝が藤壺立后を強行した(44)ことは、桐壺巻よりすれば、今昔の感があろう。桐壺巻で、桐壺帝は光源氏を東宮にしたくても出来なかった。あの時点での政治状況と現在ではかくも違うのである。弘徽殿女御が、「東宮の御母にて二十余年」(44)という記事からうかがえるように、あれから二昔以上の歳月が流れ、桐壺帝の実力はこれ程までになっているということである。この時、歴史に強い読者は、醍醐天皇の時もそうであったと思うに違いない。また中宮擁立強行ということからいえば、円融天皇の時代、一の御子の母・詮子をさしおいて、素腹の後・遵子をそうした例が思い起こされる。あの時の藤原兼家の怒りが、現時点では右大臣の怒りに相当するわけである。これは、賢木巻への伏線となっている。なお、弘徽殿女御の年齢は、四十歳くらいと推定できる。

【48】間もなく、桐壺帝の退位があり、生まれたばかりの若君を東宮とする日が来るという予告がある(44)。光源氏の第一次黄金時代は、まさにこの巻の、青海波を舞っていた瞬間にあったことが、こう言われると、よく分かる。

【49】「源氏の公事しりたまふ筋ならねば」という認識はいかがなものか。源高明追放以後の政局を意識したものか。現に、源氏物語では、光源氏が太政大臣になるのだから、奇妙な認識といえよう。

【50】藤壺が后として参内する夜。お供をする光源氏のイメージは全く『伊勢物語』の業平である。藤壺は、もう遠い雲の上。光源氏は「尽きもせぬ心の闇にく」れるばかり。

【51】最後に描かれた御子と光源氏との合体イメージは、御子が光源氏の代行であるとする宣言でもあろう。御子は、桐壺帝の見果てぬ夢、桐壺更衣の父と母の夢を、二代かけてようやく実現せしめた存在なのだということである。

(注) 源氏物語本文は、新潮日本古典集成『源氏物語 二』に依っている。括弧内数字は、その所在を示している。

